雑事記（48）

盛丘　由樹年

今回は次のふたつの文書により構成される。
探訪についてはそれなりに、もうひとつ、他作品からヒントを得て小説を書いてみた。

・戦争遺跡探訪（19）
・小説・オオカミ伝説のある山

戦争遺跡探訪（19）

①から⑤まで、日付順に記述し、撮影した写真を添える。

①川崎市平和館（2023/8/20）神奈川県川崎市中原区

８月２０日、この日は東京方面の、いくつかの美術館巡りをするのがメインだったが、途中、ここに寄ってみた。武蔵小杉駅から南に綱島街道を１ｋｍほど歩くと、川崎市平和館のりっぱな施設がある。

ここは、１９９２年４月１５日に開館したとある。

４月１５日は川崎大空襲の日でもある。ここは元々、軍需工場（東京航空計器）があった場所だそうで、戦後接収され、米陸軍出版センターとして使用されていたが、１９７５年に返還され、川崎市の管理地となった。

川崎市平和館
正面玄関は右の木のうしろ側にある。
手前の水流は、二ケ領用水。
（今は、単なる下水路？）

この平和館は戦争の記憶をとどめる博物館的な施設であり、けっこう本格的で、内容が充実しているから、興味半分で訪れるのもよい。勇ましい兵器類の展示はなく、暗めの展示品が多いけれど、それなりに充実している。敷地の横に広がる庭園（中原平和公園）には、野外彫刻作品の、大きめのオブジェがいくつかあることもよい。

私は朝の早い時間に来たので、ゆったり見て回れた。中の一部を紹介しよう。一階には防空壕の実物模型が再現された部屋があり、興味深いからさっそく入ってみた。中は暗く、意外と広かった。

この日、広島の原爆被害の特別展があり、それらを見ると、あらためて少々胸が痛む。ひどい状況だったから、あまり見たくもないというのが本音だ。

舞台の背景のような壁の一面に、岡本太郎の大きな作品が目立つ。岡本太郎らしい奇怪な絵だ。戦争の悲惨さを表しているという。

二階に上がると、天井から火のついた焼夷弾がふり注ぐかのように、空襲の状況を模した通路があり、上を気にしながら通り抜ける。おもしろい工夫だ。

別の展示で、川崎市には多くの軍需工場があったことがわかる。アメリカ軍の重要な空襲の標的だったわけだ。彼らは軍需工場も一般住居も、見境なく空爆したけれど。

展示コーナーの一角には「海軍蟹ヶ谷（かにがや）通信施設」の地下壕の精密模型が展示されている。戦時中、短波を受信するアンテナが丘の上にあり、地下で通信業務を行っていた。日吉（同じ川崎市にある）にあった海軍司令部と連絡を取っていた。その地下施設は現存するが、中は水没しているという情報がある。その一帯は今、久末城法谷公園になっている。入り口のコンクリート構造物が外から見えるというから、私は興味をひかれる。

［墜落事故の前説］

神奈川県は、米軍関係の占有地が多い県だ。基地のほか、補給物資の貯蔵施設、軍人専用の住宅地がある。さらに、軍用機の騒音のひどい地域を国有地として買い上げ、土地利用を制限している面積も広くある。

それらの地区の返還は遅々としているが、徐々に進んではいる。国も県も、返還を強く求めてはいない。返還交渉は熱心でないようにみえるし、せっかく米軍が返還してくれた、まとまった土地や区画についても、すぐに活用しない。それらの土地の再開発がままなら

ず、多くはあたかも耕作放棄地のような有様になっている現状だ。

県央の厚木基地周辺で、１９６０～７０年代は、米軍機の墜落事故が多発し、かなり危険意識が高まったが、半世紀以上もたつと、今はそれがだいぶ薄らいでいるようにみえる。しかし、遺族らの深い悲しみや恐怖は消えない。厚木基地での軍用機の離発着はいまだに多い。

大きな事故として次の三つを挙げたい。それぞれ地上の家屋の破壊を伴い、多くの死傷者を出した。

・大和市上草柳の舘野鉄工所
・横浜市青葉区の住宅街
・町田市原町田の繁華街

それぞれの概要を追って説明していく。

②旧・舘野鉄工所跡（2023/9/24）　神奈川県大和市上草柳

大和市上草柳の舘野鉄工所に墜落したケースは、「大和米軍機墜落事故」と通称されている。１９６４年９月８日、厚木基地を発進したＦ８－２クルセイダー（海軍戦闘機、Ｆ８Ｕとも呼ばれる、エセックス級の航空母艦での運用が可能だったから、ベトナム戦争で活用された）が、離陸直後にエンジン故障で失速、滑走路の延長線上を、上草柳地区の林や民家をなぎ倒しながら２００メートルほど滑走し、舘野鉄工所の塀に激突・炎上した。さらに鉄工所のアセチレンガスに引火し、爆発した。鉄工所は全焼し周囲の住宅４棟が全壊した。

鉄工所従業員３名（経営者の息子たち）が死亡、一般市民３名が重軽傷を負った。乗員は墜落前に脱出して無事だった。

今も毎年９月８日には、関係者らによって慰霊の行事が行われ、それが地方版の新聞などに取り上げられている。

この小文を書くに当たって、どうせ行くなら、私もその日に行くべきだったかもしれない。ここは国有地として管理されている。事故後、国が買い取ったのだろう。おそらく補償の一部として。ふだん金網のフェンスで囲われた一角は、施錠され、中に入れないが、その日だけは開けられる。

私は９月２４日、秋の日曜日、鶴間駅から歩いた。大和駅から森の泉公園方面に歩いて行くのが本筋だが、地図をみて、このコースのほうが現地に近いとみた。

私は大雑把な地図を頭に描きながら、いいかげんに歩いているから、また道に迷った。公園の中で出会った老婦人に正確に教えてもらった。墜落現場は地元の、年代が上の人にはよく知られた場所らしい。

ちなみに、森の泉公園は谷筋に原生林的な木々が生い茂る緑地であり、散策するのにちょうどよい。ある傾斜地には、白と赤の彼岸花が無数に咲き誇っていた。人々がそれに見入っていた。

そこは、雑木林だった。その中に、金網の外からでも、慰霊碑的な仮設の柱（国有地のため慰霊碑などを設置するのに制限がある）が、道路わきからよく見えた。

その周りは１０メートル近い高さのある雑木林が生い茂り、年月の経過（事故から今年で５９年が過ぎた）が感じられる。国は土地を買い取ったものの、ほったらかしている。手入れもしていないようだ。地元では、公園にして、出入り自由の場所にすべきだ、という声が出ているという。おそらく、厚木基地がある限り、軍用機が、再びここに落ちる可能性があると考えているのかもしれない。

ここは、厚木基地の滑走路の延長線上にある。滑走路の北端からまっすぐの、約１ｋｍのところにある。その間に、相鉄線と東名高速道が横切っているが、延長線上の真下の部分にはそれぞれトンネルを構築している。万が一、離陸直後の軍用機が落ちたとしても、車両との激突を防ぐためのトンネルだ。

舘野鉄工所米軍機墜落犠牲者の五十回忌と書かれた墓標のような柱
大和市上草柳にてフェンスの上から撮影。

私は４日後にバスの乗客の一人としてこのトンネルを通過した。トンネルというより、シェルターに見えた。

東名高速の大和トンネルは、交通渋滞が起きやすいところ、あるいは追突事故の多いところとして知られていた。その昔わたしはここを通るとき、〈なぜこんな平地にトンネルがあるんだろう？〉という疑念が頭に浮かんだものだ。大和トンネルには。渋滞の原因が別にあるとしても、軍用機墜落事故の怨念がこもっているかのようだ。

このケースでは、滑走路を走っていた時、エンジン不調に気づかなかったかどうかが問題になる。それに気づけば、滑走路上で緊急停止すべきだった。少々のオーバーラン（滑走路からはみ出すこと）があったとしても、やむを得ない。１ｋｍもオーバーランしてはいけないけれど。

③旧・米軍上瀬谷通信施設（2023/9/24）　神奈川県横浜市瀬谷区

私は大和市の墜落跡地を見てから、その足で横浜市瀬谷区に行ってみた。米軍上瀬谷通信施設跡地だ。

もともと日本海軍の火薬庫や補給倉庫施設があったところであり、戦後アメリカ軍が接収し、通信施設にしていた。ただし、一部の土地を利用していたにすぎなかったという。その広い地域（２４２．２ヘクタール）は２０１５年６月に返還され、今は主に国有地になっている。横浜市が管理しているところもあり、一部はすでに民間の農地として利用されている。国有地と民有地がそれぞれ約４５％ずつ、市有地が約１０％。

私は、広い地域の中に、旧日本海軍施設の遺物らしい構造物があるという情報を聞きつけ、相鉄線の瀬谷駅から、環状４号のまっすぐな道（ここは通称：海軍道路）を歩いてみた。柵や塀のないところが多く、中の土地に入ることが可能だったが、それは遠慮した。

海軍道路の街路樹はサクラの木だ。等間隔に立ち並んだサクラは海軍時代の名残だろう。太い幹を持つ老木だが、半数以上が切り株にされているのが、ものさびしい。

結果的に、それ以外、海軍の遺物と見えるものはなかった。米軍関係の施設も見当たらなかった。跡地の一部を眺めてみただけに終わった。言い訳として、この日、私には時間と体力面で探し回る余裕がなかった。

この広い土地は、どうなるんだろう、と思いやられる。半分ぐらいの土地について、民間事業者に払い下げてのテーマパーク構想があったというが、採算が取れそうもなく、挫折したという。ともあれ、今は本格

的な開発計画が進む前であり、もっとよく探索すれば、何か見つかるかもしれなかった。

米軍上瀬谷通信施設跡地の風景として
その一部を写したもの。

どこまでも続くような、まっすぐな道路を歩いて、跡地の広さを感じさせられた。ようやく、東急田園都市線のつきみ野駅にたどり着いたとき、思ったより時間がかかりすぎていた。当初は欲張って、このあと平塚へ行って一年に一度の、若い人たちの演劇を鑑賞しようと予定していたのだが、その開始時間（１３時３０分）に、とうてい間に合わなくなったのは残念。

④横浜市青葉区米軍機墜落場所（2023/9/28）神奈川県横浜市青葉区荏田北

１９７７年９月２７日、厚木基地を飛び立った、アメリカ海兵隊所属のＲＦ－４Ｂファントム Ⅱ（もともとは戦闘機として設計された機体だが、これは派生型で、偵察専用に特化したもの）が、エンジン火災を起こし、横浜市青葉区荏田北（えだきた）３丁目付近の住宅地に墜落した。２０戸以上の家屋が炎上、破壊された。火災で死者３人、負傷者６人を数える大事故となった。死者３人は母と二人の子だったから、悲劇的だった。

その若い母・和枝さんは、幼い子二人を抱え、燃え盛る火炎の中、必死に助け出そうとしたが、３人とも火炎に包まれた。火傷で子どもたちは数日で死亡。重度の火傷を負った彼女は、医療チームの必死の治療を受け、身体的には回復傾向にあったが、子どもの生死がはっきりしない状況が長すぎだ。

一年以上子どもの死を知らされなかった。子どもの生死は彼女にとって何よりも重要な情報だったことだ

ろう。

子どもが生きていると聞かされていながら、会わせてもらえなかった。リハビリに励む日々を過ごしたけれど、もし子どもが生きているならば、どうして会えないのか、疑問に思ったことだろう。単にやけど姿が醜いから、などの理由で納得するだろうか。やがて、周囲の者たち、病院関係者も夫も親類縁者も知人たちも、みんなうそつきだったことがわかってしまう。

結局、精神的なダメージが大きすぎ、やけどの治療後、精神科病院に半ば強制的に入院させられた。夫からも見放されたのだろう、離婚に至った。

事故から4年4か月後に精神科病院で死亡した。もちろんこの死亡退院は、事故関連死に数えられた。NHKアナウンサー・加賀美幸子さんが涙ながらにこれを伝えたという。

9月28日、私は東名高速バスで行った。「東名荏田」のバス停で降り、そこから15分ほど歩いて現地に着いた。緩やかな坂を上ったところに大入公園という小さな公園がある。そこが墜落場所の近辺と言われている。周辺は復興し、中級の戸建て住宅が建ち並ぶ。閑静な住宅街と言いたいところだが、そうとは言えない。空の上から航空機（特にヘリコプター）の爆音がときおり聞こえてくる。やはりこの辺は、軍用機の飛行ルートの下にあるのだろう。

横浜市青葉区荏田北の大入公園の前で
この近辺で墜落事故があった。
公園には不審者以外誰もいなかった。

墜落の痕跡はもうないと聞いていたので、おおざっぱに見て回った。公園内に、ひっそりとした道祖神（どうそじん）の石塔ふたつを見つけたが、それ以前からあった古いものだろう。

ここにはないが、事故にちなんだものは、遺族たち

によって作られたという。その一つが母子の石像だ。私は、横浜市中区・港の見える丘公園のフランス山にアート作品的なものが設置されていることは以前から知っていた。墜落現場とはだいぶ離れているから、私は、どうしてこの場所なのか、といぶかったりした。おそらく、和枝さんが好きな場所の一つだったのだろう。

墜落の原因は、エンジン火災だった（組み立て工程におけるミスとされた）が、乗員２人は脱出して無事だった。事故から生還したら、アメリカ社会では、だいたいヒーロー扱いされる。

そのときの状況が私には分かっていないが、結果的に乗員は機体を市街地の真ん中に墜落させたことになる。それを回避できない状態だったか、疑問に思う。乗員（自分たち）の生命を優先しすぎて、地上への配慮に欠けていた、と私は推察する。機体をどこに落とすかの配慮がされていなかったとみえる。

つまり、人のいない海や山に落とすように操縦できなかったのか、あるいは努力したか、という疑問を私は持つ。緊急脱出装置のボタンを押すのは、ぎりぎりのタイミングで、やってほしかった。エンジンに火災が発生しても、ある程度は機体を制御できると思うからだ。特に、離陸直後は、ジェット燃料を満載しており、地上に墜落したとき、大火災になりやすい。地上での事故を最小限にしようとする配慮が必要だろう。

⑤町田米軍機墜落事故（2023/9/30）　東京都町田市原町田

この事故は１９６４年４月５日に起きた。町田市は東京都に属するが、地理的に神奈川県とも縁が深いから、一連の事故例の一つに加えたい。

事故を起こしたのは米海軍機の戦闘機（Ｆ８－２クルセイダー）で嘉手納基地から厚木基地へ向かう途中で故障し、乗員は墜落前にパラシュートで脱出し約２ｋｍ離れたところに着地後、米軍病院に収容された。

機体は６０度の急角度で原町田（厚木基地まで約１０ｋｍ地点）の繁華街に墜落した。火災が発生し民家７戸が全焼、７戸が半壊した。この事故により一般市民４名が死亡、重軽傷者３２名を出した。

機体を繁華街に落としたわけだから、このケースも乗員が脱出したタイミングが問題だろう。僚機とともに２機で飛行していたから、連絡を取り合って決めたことだろうが、両者とも地上が見えていなかった？

安易に脱出した疑いが残る。彼らには厚木基地の滑走路が見えていたはず。基地なら、消火設備が整っていた。

さて、私は9月30日に現地に行ってみた。この日ちょうど町田に用事があった。ここでも、もう地上には墜落の痕跡や表示物は何も残っていないと聞いていたけれど。

JR町田駅に近いし、住所が分かっているので辿りやすい。原町田2丁目だ。当時は商店が立ち並んでいたそうだが、現在、複数のビルが墜落現場の区域に建っている。歩道の人通りは少なかった。

町田の繁華街の中心はおおむね西寄りに移動したから、住む人も大きく変わったことだろう。

でも、この地中深くに、事故機のエンジンが今も眠っている。機体は相当な勢いで地面に激突したわけだ。エンジンを回収できなければ、事故原因を解明するのは難しいから、米軍主体で懸命に探したらしいが、結局、掘り出すことをあきらめた。彼らには事故原因など、すでに分かっていたのだろうか。

東京都町田市原町田の現在の風景
中央のビルと、横の駐車場、およびその裏のビル辺りが墜落現場とされる、

参考資料
・川崎平和館のパンフレット
・ウィキペディア
大和米軍機墜落事故
横浜米軍機墜落事故
町田米軍機墜落事故

小説

オオカミ伝説のある山

盛丘　由樹年

妹夫婦の間に子ができた。妊娠後期になったとき、産婦人科医院で、胎児の画像を見せられた。超音波診断で、おおよその体型がわかるというものだった。

どんな子が生まれてくるか、楽しみであり、夫婦がそろって診察室で医師の説明を聞くことになった。

そこで衝撃的な事実を聞かされた。画像を見せられ、胎児にはしっぽが残っており、鼻先が尖り、口が大きい。発生段階の胚には、しっぽが形成されるが、ヒトの場合、成長に伴い、消えるものだ。尾骨という痕跡が残るだけだ。

これには、妹A子の連れ合い、義弟Bが受け入れようとしなかった。待合室にもどると、声を荒げた。

「あれはオレの子じゃない。妊娠時期を考えると、怪しいと思っていたんだ。オレが九州に一か月長期出張していたときのことだろう。A子、誰とやったんだ？浮気するにしても、避妊するのが流儀だろ、オレだって…」

Bはうしろをふりむいて、その場にいた私に言った。

「やったのはアニキか？」

Bは照れ隠しに、冗談半分で、あてずっぽうで言ったことかもしれない。しかし私が否定しないと、顔色を変えた。

「それじゃ、オレには育てる義務はない。アニキが育てろ」と言い放った。これにも私は無言で了承した。単に、反論しなかっただけだが。

「A子！　生まれたら、養子としてアニキにくれてやれ！　いいな。それ以上、オレは言わんでおく」

犬の仔を取引するようなことが決まってしまった。

このとき、私の妻も妊娠しており、胎児の画像を見せられた。順調な生育を示し、健康的ではあったが、その胎児にも余計なものがあった。しっぽだった。対応した医師にしても、同じような例が2組で続き、唖然としていた。

医師〈何かのたたりだろうか。薬害の可能性もありうるし。新型コロナウイルスやそのワクチンが影響した可能性（副反応の一つ？）も排除できないぞ。やっかいな問題だな。とりあえず、学会に報告しようっと〉

「なに、これは？　イヤー」　妻は突っ伏して顔を手で覆って泣いた。

月満ちて、一週間ほどの間隔があって、次々に二人

が生まれ出た。二人合わせて男女のペアだ。しっぽだけでなく、どちらも体毛が濃い。全身、茶系の毛でおおわれている。生まれたばかりの赤ん坊はサルに似ているとは言われるが、この二人はイヌに似ていると言わざるをえない。鳴き声が、赤ちゃんらしくない。ワンワンと言っている。

私は冷徹に考えた。この容姿では、この人間社会で生きてゆくのは難しい。その顔を見た人すべてが引いてしまう。おとなたちなら、見て見ぬふりをしてくれるかもしれないが、ぶしつけな、差別意識の強いガキどもにからかわれ、いじめぬかれるに決まっている。

非情ながら、私は親としての養育をあきらめ、育児放棄して、山に捨てることに意を固めた。殺してから、死体を遺棄するのではないけれど、山に捨てることは未必の殺意になるかもしれない。自分が直接手を下すわけではない。生まれたばかりの赤子が、山の中で生けて行くのは難しい。絶望的な試練に違いない。それでも、真の生命力があれば、あるいは何らかの助けが手を差し伸べて呉れれば、生き延びられるチャンスがある……と都合よく考えた。

私は、医院長に「死産だった」ことを強引に説き伏せた。彼はつべこべ言ったが、私は恫喝した。吠えまくるとともに、それなりの礼金を滑り込ませた。こういう交渉にかけては、私はプロだった。

退院間近の二人の女から、さっさと赤子を取り上げ、車に乗せた。彼女たちは当初の驚きから、平静をとりもどし、自分たちで育てる気にもなっていた。私は怒鳴った、「いやだと言ったのは、どの口なんだ？」

ビンタの一発を食らわしたかったけれど、ここは自重した。私には根っからの悪人には成れないところがある。

事前の医院長の承諾を得ていなければ、私は嬰児誘拐犯になってしまうところだった。幸い、パトカーが追いかけてきたりはしない。

目指すは、秩父の山中と決めた。秩父には、オオカミ信仰で有名な神社がいくつかある。中でも三峰神社が、古くから崇拝されてきた。そこは、今ではかなり観光地化されている。そんな山の神が鎮座する神域に、赤子を捨てに行くとは、なんと罰(ばち)当たりのことだろうか。神の加護があるものだろうか。おれには、罰が当たってもいい、という開き直りがある。

秩父には、今でも、オオカミの生き残りらしい野犬を目撃したとか、遠吠えを聞いたなどとするうわさが

ある。近年、「秩父野犬」の姿が撮影されている。オオカミとは断定されていないから、仮の名だという。撮影したのは、オオカミを探しに来ていたマニアックな連中だから、やや信用できないところがある。生物学的に実証されれば、すばらしい発見になる。

県境を越えた山梨県には、甲斐犬がいることにも注目したい。わたし自身、10年以上前のある日、山中湖から籠坂峠を下った道路沿いにあった（ここは静岡県）西欧風のしゃれた食堂に、遅い昼食をとろうと、入った。すると、店の奥の方から、毛を逆立てた精悍な犬に、不審者と思われたらしく、えらく吠えられたことがあった。〈おまえはオオカミか？〉とわたしはムッとした。店主によると、それが甲斐犬とのことだった。不審者のにおいをかぎつけたのだから、有能な番犬なのだろう。オオカミが飼い犬になったものかもしれない。

秩父山系の山岳地帯の奥に入っていく。途中大きなダム湖があったりして、秩父にも開発が進んでいることがわかる。その先、一般車通行禁止の林道に行き着いた。それから先の林道は荒廃しており、四輪駆動車でないと、とても走破できそうもなかった。車を道路わきに止めてから、用意してきた一通りの登山用具を身につけた。二人の子はリュックサックの中で、毛布にくるまり、おとなしく眠っている。ずいぶん重いと感じられるリュックだが、仕方がない。帰りには軽くなるだろう。行き交う人もなく、初秋の山をひたすら上ってゆく。

林道の終点に行き着き、ふみ跡が残るだけの、細い道に入ってゆく。どこへ続くのか、よくわからなくなってきたが、道がつづいている。

二人の赤子をどこで降ろせばいいのか、に迷った。どこも適所だとは思えない。しっくりするところがない。さらに奥へ進んだ。日が翳ってきた。夕暮れが近い。帰りはライトをつければ、何とか降りられるだろうと思っていた。この辺は日帰りでの登山コースでなく、どこかの山小屋に泊まるプランを考えるべきところだろう。でも、私は夜目に強く、月が出ていれば、十分に行動できた。

ひとつの峠のあたりで、赤子たちを下ろせばよさそうな場所についた。見上げると、前方に中型のイヌの姿が見えた。私は接近するまでその存在に気つかなかった。ほとんど動かないで、こちらを正視している。こんなところにいるのは、野犬であろう。ここは、今でもオオカミの目撃情報が発信されることのある山域

だから、オオカミかもしれなかった。伝説のオオカミに出会えれば、うれしいが、もし襲われたりすれば、恐ろしいことになる。何を持ってオオカミと識別するのか、私にはわからないから、これは野犬ということにしよう。いずれにせよ、手ごわい相手だろう。腕力には少々自信のある私だが、しり込みする。逃げるには、接近しすぎていた。ここで背を向けたら、すぐに跳びかかられそうだった。

〈私を襲うなら、この赤子たちを食べてからにしてくれ〉　なんと、よこしまな私の心。これが仏教説話なら、「私を先に食え」と私自身が身を投げ出す場面だろう。私はリュックから、二人の赤子を取り出し、その犬のほうに差し出した。

野犬はその姿を見てから、私のほうに歩みを進めると、唸り声をあげて威嚇した。その唸り声を「受領した。お前はもう引き下がれ」の意味に、私は解釈した。

私は、その場を立ち去るしかなかった。そのあと赤子たちはどうなったか、わからない。車を止めたところまで走るように山を駆け下りた。

振り返ってみると、実は、野犬に遭遇した場所には、私にかすかな記憶があった。３０年ほど前の古い、原初の記憶だ。

私が赤子の時、あの場所で、ずいぶん長い間、心細さとひもじさで、泣いていた。たまたま山奥に入り込み、その場を通りがかったハイカーに拾われた。持ち去ったのかもしれない。その後、私は人間世界で養育され、成長した。幼年期に殺伐な施設で過ごしたから、時には荒れた。孤児として養父母に引き取られ、養子にされた。妹とも血縁関係はない。私は結婚を機に、養父母の姓氏からはずれ、今では、紳士づらして奥山小太郎と名乗っている。

私はオオカミの子であったかもしれない、という思いが湧き上がってきた。私の容貌がオオカミらしくなかったから、捨てられたのだろうか。単に、親が目を離したすきに、人間のハイカーによって持ち去られてしまったのだろうか。

あの野犬は、ずっと私が来るのを待ち続けていたようにみえる。一族共通の匂いをかぎつけたのかもしれない。私は成長とともに大きく変容したけれど、野犬は嗅覚で識別できたのだろう。一般の人間が来たとなれば、彼（彼女？）は接触を避け、身を隠したはずだ。

子どもたちは、隔世遺伝的な要素が現れてしまったのかもしれない。ともあれ、野犬が私の代わりに、あの子たちを育ててくれる核心が持てた。あの秩父の山

中で子どもたちを率いて、存分に鍛えてやってほしい。子どもたちには野性で生きる知恵を身につけてほしい。野性では、児童養護施設などで暮らすより、ずっとときびしいことは、想像がつく。

野犬たちにとって、最大の敵（ライバル）は、クマでもイノシシでもなく、ヒトだろう。近代になってオオカミなどは、害獣とみなされたために、駆除の対象になり、たちまち絶滅に追いやられた。神の使いであるなどという民間信仰は、一部を除き、全国的に否定されてしまった。私の近隣の丹沢山地にも、明治期までは、多くの生息記録があった。旧家にオオカミの頭蓋骨だというものが、いくつか保存されている。時々、郷土博物館に展示される。中には、頭部に鉄砲の弾が貫通した穴が見える。至近距離から撃ったものだろう。

各地の山では、オオカミが絶滅したために、シカなどの野生動物が増えすぎるという弊害が出ており、人々は里山周辺にフェンスを設置したりしているが、その費用対効果は疑わしい。

オオカミは集団行動をとる動物であり、集団で獲物を追い詰める。ヒトや家畜にとってそうとう脅威だった。集団の絆があって、本領を発揮できる。その点においては、人間に近い。